
恋のキューピッド君

わたるくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋のキューピッド君

【Z-コード】

Z5716Z

【作者名】

わたるくん

【あらすじ】

高校に入学してから三か月が経つた。クラスでの俺の立場と言つたら、教室でゲームをしたり、ラノベを読んだりしているキモいヲタク君。

そんな俺こと、上木幸司に舞い込んできたのは、ヲタクという不本意なレッテルを張りやがった女の子の恋愛のお助け！？

なんで、そんな嫌いなヤツを助けなくちゃならないんだ！ 俺は断固拒否するぞ！

絶対、絶対だからな！！

……とか言いつつ、結局巻き込まれる男のお話。

高校生活つてシラいよね？（前書き）

他に書いた小説とは違い、初めての一人称に挑戦してみました。
やつぱり恋愛が絡んでくると一人称の方が主人公の思っていること
が表現がしやすかったり（笑）

高校生活ってシラいよね？

「なあ、上木^{かみき}のヤツまた教室でゲームやってるぜ？」友達が一人もいないからつて寂しいヤツだよな」

「仕方ないんじゃないか？あまり人と話さないタイプみたいだし、見た目もダサいじゃん。女子にもキモがられてるみたいだし、あんなヤツと仲良くしたら、俺たちまで同類だと思われるつて」

「ハアア……また俺のことを貶す声が聞こえてくる。入学してからもう何ヶ月か経つてるのに、アイツ等もよく飽きないな。そんな教室の扉の前で話なんてしないで、言いたいことがあるなら、面と向かつて言えってんだ。」

「でもよ、上木^{かみき}も災難だよな。香澄^{かすみ}にまで目を付けられて、クラスの女子全員からアタクつて呼ばれて嫌われるんだぜ？」俺なら耐えられないね」

「うるせえ、口だけの同情なんていらねえんだよ。香澄にイビられてないお前等なんかに、俺の気持ちなんて分からないだろうぞ。もう、なんていうかね？」教室の隅で女子グループが集まつてヒソヒソ話しているだけで、俺の悪口言われてるような気分になるんだよ。その時は、わざと寝たふりなんかしてるが、耳だけは俺の意思に反して、無意識に女子たちの会話を盗み聞きしようとするとなんだ。

……結局、聞こえないんだけどな。

「それに……つ！？」

「おい、どうしたんだよ……つ！？」

「おつと二人が黙り込んだぞ。これはアレだな。アイツの『登場つてわけか？』

「ちょっと、アンタ等。教室のドアの前に立たないでくれる？ちよー邪魔なんですけど？？」

ソプラノボイスの奏でる澄んだ声と共に、女の子が一人教室に入

つてくる。

緩いウェーブがかつた長い髪は茶色に染められており、校則つて何だっけ？と思わせるほど、足を露出させた短いスカート。おそらく特殊な趣味でもないかぎり、ほとんどの男が可愛いと言つだろ。正直、見た目だけなら雑誌でモテルやってますと言われても信じてしまうくらいだ。

そう、彼女が俺の天敵、香澄恋歌かすみれんかだ。

クラスでは、その持ち前の容姿と明るさで人気があるようだが、俺からみたら嫌な女もいいところだ。

すべてが悪いとは言わないが、香澄のせいで俺がクラスからハブられたのは間違いないと思つていて。

昼休みに一人でゲームやってたくらいで『上木が一人でゲームやつてるよ、アイツってヲタクなんじやない？』なんて噂流しやがつて。何故それくらいでヲタクのみならず、キモ男キモおという烙印まで押されなければならぬのか……俺にはまったく理解ができない。最近は、ラノベとかゲームが好きというくらいでヲタク扱いされるんだから、嫌な世の中になつたもんだぜ。

昔のことを思い出してたら、さつきの男二人組が黙つて道を譲つたな。アイツ等もクラスじやあそれほど目立つ立場じやないからな。香澄から見れば、好みないタイプなんだらうさ。

クソッ……本当にムカつくヤツだぜ。

そんなお互いを嫌つてた関係だつたのに、なんだつてあんなことになつてしまつたのだろう……。

俺が高校に入学してから三ヶ月の時点で、すでに来年のクラス替えを夢見ていたのに。

あんな横暴、ギャルに振り回される高校生活を送るハメになるなんて……誰が想像できただろうか。

すべては始まりは、学校から変人と揶揄やゆされている、あの先輩か

ら始まつたことだつた。

高校生活について語り合おう？（後書き）

まだまだ序章もいいところなので、最後までお付き合いしていただけたら嬉しいです。

いつもと変わらない朝

ପାତା ୧୦୦

聞きなれた電子音が鳴り響くと、いつものように目を覚ます。重い目蓋を開くと、カーテンの隙間から覗く陽光が目に入つてくる。刺激するような眩しさに少しだけ目を細め、ベッドの温もりに恋焦がれながらも、寝ぼけた意識が覚醒していく。

「ああ……桂林だ！」

すでに何度も同じ憂鬱な気持ちを抱えたまま起き上がり、支度を始めた。

今日は六月十三日の月曜日だ。

再び、新たな一週間が始まると思うと、気が重くなる。

なせなら、俺、上木幸司は学校でハラされているからだ。暴力やイジメとまでは言わないが、女子からはヲタクキモイという烙印を押され、男子からはそんな女子に嫌われたくないと距離を置かれてしまっている。

その事実を最初に知ったときはショックだつた。

今まで友達が多くたとは言わないまでも、小さいころからの付き合いがあるヤツや、同じゲーム好きのヤツなんかと、中学生の時までは楽しく過ごすことができていたのだ。

そんな俺が、家族の事情によって実家から遠く離れた高校に入学したため、周りに昔からの仲の良かつた友達が一人もいなくなってしまったのだ。元々、あまり人とコミュニケーションをとる事が苦手な俺としては、初めて出会つヤツに声を掛けることすら躊躇つていたのだ。

しかし、そんな俺の事情など知らないかのように、周りの連中は「日が経つ」とどんどんグループ化していく。そんな仲のいいグループ

ー入つていくなんてさら難易度が上がる。

高校入学して一週間、俺は『ぼっち』な状況に追い込まれていた。

そんな俺の学校での暇つぶしと言えば、昔から大好きだったゲームだった。寂しさを紛らわせるために、仕方なく教室でゲームをプレイしていたら、ある女の捌け口という名の犠牲になってしまったのだ。

その女の名前が

香澄恋歌かすみれんかだつた。

入学した当初から、アイドル顔負けな美貌と天真爛漫な性格で、すぐにクラスで頭角を現してきた。

たちまち女子たちの中心に躍り出て、男子たちにも人気がある。香澄が一言、アイツが嫌いと言つただけで、そいつはクラスでの居場所がなくなると言つても過言ではないだろう。

……実質、俺がその立場を確立してしまったんだがな。

あの時の迂闊な自分を殴つてやりたいぜ。一度イメージが定着したら、そこから抜け出すのは簡単じゃないからな。香澄は自分の思い通りになつて楽しいんだろうが、俺からしてみれば、本当に溜まつたもんじやねえつーの。

そんな状況でも入学から一ヶ月が経つた。

慣れとまでは言わないまでも、それが当たり前の日常だと思えるくらいには。

それでも一週間が始まる月曜日の朝は嫌いだ。誰が好んで友達が一人もいない学校に行かなくちゃならないんだと、気落ちする。のろのろと準備を終えて、玄関にたどり着いた。

「ああ……鬱うつだ」

俺は、再び何度も呟いたか分からぬほどセリフを吐きながら、玄関の扉を開けて一步を踏み出す。

今日も、いつもと変わらない生活が始まると考えたまま。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5716z/>

恋のキューピッド君

2011年12月19日13時47分発行